

THE YMCA

日本YMCA基本原則

私たち日本のYMCAは、
イエス・キリストにおいて示された
愛と奉仕の生き方に学びつつ
世界のYMCAとのつながりのなかで、
次の使命を担います。

私たちは、
すべての人びとが生涯をととして
全人的に成長することを願い、
すべてのいのちを
かけがえのないものとして守り育てます。

私たちは、
一人ひとりの人権を守り、
正義と公正を求め、
喜びを共にし痛みを分かちあう
社会をめざします。

私たちは、
アジア・太平洋地域の人びとへの
歴史的責任を認識しつつ、
世界の人びとと共に
平和の実現に努めます。

2017年1月1日発行 (毎月1日発行)
1947年10月27日 第三種郵便物認可
本体価格45円 (外税) (送料62円)
発行/公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003 東京都新宿区本町7
TEL: 03-5367-6640 FAX: 03-5367-6641
URL: http://www.ymcajapan.org/
発行人/鳥田 茂 編集人/山根 一毅
印刷/あかつき印刷株式会社

負の連鎖から「笑顔の連鎖」へ

全国YMCA総理事会議長・横浜YMCA総理事
田口 努

生まれたばかりの赤ちゃんの笑顔は、「自分が笑うことで周囲が優しくしてくれる」という新生児微笑という本能的な笑顔です。さらに成長すると周囲の表情の変化を感じ、親など身近な人と同じ表情を作るよう脳が指令を出し、微笑に微笑を意識的に返すようになります。「安心だよ、信頼しているよ、すべてを委ねるよ」と笑ってくれる赤ちゃんに、微笑で応え、また赤ちゃんが微笑返しすることで親も子も成長します。

成長する子どもの笑顔を見守りながら、喜びや悲しみに寄り添い共感する中で、親も子も共に成長していきます。しかし、子どものためと言いながら、自分の笑顔や喜びのために、子どもを自分の人形のように操ろうとしたり、自分の理想とする型に押し込めようとすると、その子の笑顔につながらないこともあります。また、地域や学校では、どこか違った部分がある子を排除し、みんな一緒であろうとする雰囲気の中、悩み苦しむことも増えています。

作家の吉本ばななさんは、著書「おとなになるってどんなこと?」で、「自殺というのは、心の中に愛の貯金がなくなったときにするのだと私は思っています。愛というのは生易しい意味の愛ではなく、愛という名のエネルギーのことだと私は解釈しています。人生の初めに親からたくさん愛をもらっていると貯金はなかなかなくなりませんが、そうでないとなくなることがあったときに一気にエネルギーがなくなってしまいます」「愛の貯金のいいところは、与えることで貯金がたまる

ということですよ」「なにをするために人は生まれてきたか」というと、私は、それぞれが自分を極めるためだと思っています。人がその人を極めると、なぜか必ず他の人の役に立つようになっていきます」と語っています。愛の貯金は、その子が全人的に受容され、本来持つ力が伸ばされていく家庭、学校、社会の環境の中でたまっています。

人生は微笑を返すことから始まり、その連鎖が子どもを育てます。喜びや悲しみに寄り添い共感する中で育まれる微笑の連鎖を阻害する暴力、いじめ、虐待、社会的貧困などを断ち切るために、私たちは、断固として「いけないことは、いけない」と表現し、行動しなければなりません。

昨年、全国で「YMCAピンクシャツデー」に取り組んでいます。2月の第4水曜日にピンク色のシャツや小物を身に着けることで、「いじめや暴力は、人格を否定し、心を傷つけ壊すことだから絶対いけない」という意思表示を社会に対して行っているのです。これは、いじめの子、いじめに遭う子、いじめを傍観する子へのメッセージでもあります。自分の中にある差別、偏見、いじめの心と向き合うことを通して、この社会が負の連鎖から、笑顔の連鎖へと変わっていくことを信じます。子どもたち一人ひとりが、神様から与えられた賜物を自分らしく輝かせ、他者のために生きる力を育てていける、希望ある社会をつくらせていくために、来る2月22日、皆さんもピンクのシャツを着てみませんか。



***ピンクシャツデー**
2007年カナダの学校で、ピンクのシャツを着て登校した少年がいじめられるのを見た先輩2人が周りに呼び掛け、翌日、多くの生徒がピンクのシャツを着て登校。学校から自然といじめがなくなった。このエピソードは世界中に広まり、今では70カ国以上でいじめ反対の活動につながっている。
日本のYMCAも、カナダで最初にこの出来事があった2月の第4水曜日を、全国でいじめを考え、いじめられている人と連帯する思いを表す日としている。

(左)横浜YMCAがバンコクYMCAと協働して支援する子どもたちも、「ピンクシャツデー」ではピンク色を身に着けて、いじめ反対をアピール(タイ・バヤオセンター)
※バヤオセンターについては、3ページをご覧ください。

ラポール

相手と向き合って
心を合わせていくこと。
(仏語「愛」と「共感的関係」)

弱いときにこそ強い

日本基督教団
高橋教会牧師
浅原 一泰

人に弱みを握られたくない。ずっとそう思っていました。小学生の時に右の大腿骨を骨折して3カ月ほど入院し、退院後も松葉杖を突きながらの通学が続いたので、折った方の足は筋肉が弱くなり、ギブスを外すと腕よりも細くなっていました。同級生との体力の差は歴然とし、駆けっこでは鈍足の極みでした。その弱みを誤魔化したくて、私は点取り虫になりました。不純な動機で勉強したわけですから、そんな勉強が身に付くわけもなく、まして体力が回復したこともありません。体力を回復するには、自分に鞭打って鍛えなければならませんでした。しかし、体力を取り戻しても、それで解決とはなりません。弱みを見せまいとした時間があまりにも長かったため、無意識のうちに自分は「欠陥品」だという潜在意識が芽生えていたのです。そして大学生の時、私は交通事故に遭い、1カ月間意識不明となりました。最初の10日間は「死を覚悟してくれ」と、親は医者に言われたそうです。奇跡的に障がいも残らず回復できましたが、その時は体力も学力も決定的に遅れてしまいました。自分の弱さを直視せ

ざるを得なくなり、心はどん底へと突き落とされ、こんな自分は「生きる資格などない」とまで追い詰められた時、なぜか私は聖書を開いていました。聖書の中にザアカイという徴税人が出てきます(ルカによる福音書19章)。彼は周囲から嫌われていても、その劣等感を金を稼ぐことで誤魔化します。イエスが彼に語り掛けた時、彼は自分を人間のくずだと認め、それで彼は生まれ変わります。私も自分が人間のくずだと感じたその時、事故では死なせず生まれ変わらせるためにイエスが私を呼んでいる、と思えました。そして、初めて自分の弱さを認めることができました。それはイエスによって私が変わる瞬間でした。「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」(コリントの信徒への手紙二 12章9節)。弱いからこそイエスが背中を押して、弱さに耐えさせようとしてくれている。弱さで悩む人間すべてをイエスの力が立ち上げようとしてくれている。だから同じ悩みを持つ人びとと互いに助け合い、愛し合える。今は心からそう思っています。

Vol.20

We All Belong to YMCA

YMCAの活動に参画するユースからの発信

◆清泉女子大学YMCA

◆内容：2010年に新設された大学内サークルの学生YMCA。被災地支援ボランティア活動や国際交流に関心が高い部員が多く、現在約30人が所属している。



左端が中村さん

私にとって学生YMCAは視野を広げる場です。大学で別々のことを学んでいる多種多様な学生が集まれば、「ボランティアとは何か」「ジェンダーとは？」など、正解が1つではない問いを前にたくさん意見が飛び交い、YMCAに入って3年たつ現在でも、「こんな考えもあるのか!」と、毎回新鮮な気持ちになります。

熊本地震から半年が経過し、関東にいる私たちにできる支援は何か、震災の記憶を風化させないためにはどうしたらよいかを考え、10月15~16日に新宿駅前街頭募金を行いました。5月に続き2回目の実施でした。

より多くの人たちに呼び掛けるために、被災地の現状や募金の必要性を伝え、YMCAの支援活動の様子や学Y活動をチラシに載せたりしてアピールしました。通り掛かる人になかなか気付いてもらえず、素通りされることも多い中、めげずに声を張って呼び掛け続けると、次第に子どもから年配の方まで幅広い世代の方々が協力してくださるようになります。私たちの想いが届いたようでうれしく思いました。立教大Y7人、中央大Y3人、清泉女子大Y1人、埼玉YMCA1人の延べ12人が参加し、2日間で合計55,181円の募金を集めることができました。

今後も、被災地の現状やニーズに合わせ、今いる場所のできる支援を続けていきたいです。

中村 萌 (清泉女子大学 YMCA 3年)

学荘に書く、ピアノとウクレレの
コラボレーション



参加する権利

—東京YMCA「野尻学荘」の場合—

野尻学荘(以下、学荘)は、東京YMCA野尻キャンプにて小学5年生から高校3年生までの男子が2週間、生活を共にするキャンプのことです。学荘は1932年に始まり、創設者、小林弥太郎氏の「光に歩めよ若き友よ、限りなき成長こそ日々の祈りなれ」という標榜のもとに、今日まで受け継がれています。

東京YMCA
スタッフ
小松 康広

今年度の第81回に至るまで、大切に繋がれている、学荘の心意気を出すもの一つに「次回の学荘参加者に向けたメッセージ」があります。メッセージは毎回、ポーズ(学荘参加者)が話し合ってから、閉荘式で読み上げます。第1回参加者による「第2回野尻学荘の諸君へ」というメッセージの中には、「ここで養われた理想と友情とを都に帰ってからも益々成長せしめて、よき指導者となりたいと思っています。来年この学荘に生活する諸君、私共が今年にここで受けた喜びにもまさる喜びをこの学荘に於いて受け取れんことを祈ります」という言葉が残されています。

学荘では、同年代の小グループごとにキャンピングで共同生活をしながら、さまざまな活動に参加します。毎年行われる枇杷島からYMCAまでの約3kmの遠泳に初挑戦したボーイズからは、「遠泳では水が冷たく、こごえそうになりました。でも、寒さと腕の痛みを2時間40分耐え、無事に完泳できました。これは本当にうれしかったです」という感想が寄せられました。

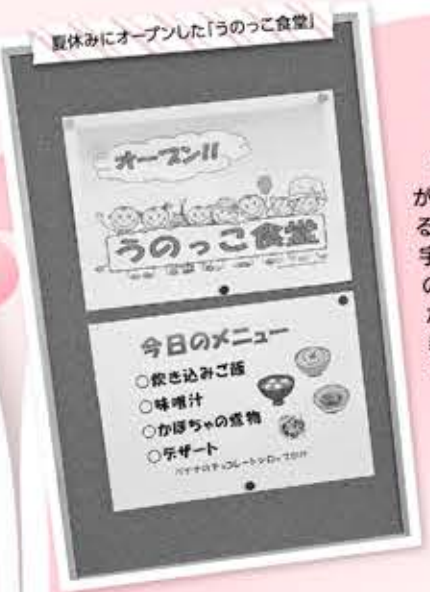
同時に、ここでは一人ひとりが自分の時間をつくり出し、判断して行動する機会も大切にしています。毎日のフリータイムでは、キャンプ場外に出なければ、何をしても構いません。初参加のボーイズは、初めのうちは何をしたらよいのか戸惑いもあるようですが、数日たつと、木の枝で箸とか何かを作ったり、本を読んだり、あるいは仲間を誘って湖にダイブしたりと、自分の時間を楽しくするようになっていきます。



いざ、アクティグへ!仲間と目指すは琵琶島

私たちは、仲間との関わりの中で自分を見いだしていく姿を、常に応援し見守っています。

「来年は、今年よりも多くの新しいことにチャレンジして、より学荘での生活を充実させてほしいと思います。これが、今年のボーイズ43人から「第82回野尻学荘参加者」へ向けられたメッセージです。



生きる権利

—YMCAせとうち「うのっこ食堂」の場合—

YMCAせとうちが地域と協働運営している「学童保育うのクラブ」のある宇野小学校学区で、2016年7月、「うのっこ食堂(こども食堂)」がスタートしました。宇野学区では3年前から「うの放課後宿題教室」を地域の方々が運営し、YMCAがお手伝いをさせていただいています。ここでは、困難な状況におかれている子どもたちとの出会いもありました。子どもたちと接することを通して地域の方々には、「この子らには、この学区の中で育っていく場が必要だ」という思いを持たれ、それが「うのっこ食堂」実施へとつながりました。

YMCAせとうち
スタッフ
市川 愛

うのっこ食堂は、「地域みんなで運営するこども食堂」を第一のポイントとし、連合町内会をはじめ、地域の各種団体に協賛をお願いしました。また、関わるボランティアそれぞれの得意分野が生かされるようにと、実施前に何度も打ち合わせを重ねました。

まずは、夏休み期間の日に2度実施した後、平日夜の食堂をスタートさせました。ここでは、子どもたちも毎回食事作りを手伝います。地域の方々に寄り添われ、出来上がったご飯と一緒に食べ、子どもたちもお腹も心も満たされます。平日2度目のメニューはハンバーグとスープ。「うのっこ食堂はとってもおいしくて楽しい!」「みんなでごはんを作って食べるのが一番うれしい!」など、子どもたちからはたくさんの声が聞こえています。

地域の方々には、「うのっこ食堂はただご飯を食べることだけが目的ではなく、ここに来る子どもたちと地域の人たちが関わり、どう受け止めていくかが重要だ」とおっしゃいます。うのっこ食堂は、子どもたちがたくさん愛情の中で見守られ、育つ場所になることを目指しているのです。信頼できる大人たちと一緒に、子どもたちが食事する風景は、イエスが愛を持ってたくさんの人びとと囲んだ食卓のようです。YMCAが、地域の皆さんの中の一「ピース」となり、共に子どもたちの健やかな成長を支える活動をしていくことは、大きな意味があると感じています。



みんなで作った、おいしいお昼ご飯



「表コミ」生。一人ひとりが、自分らしく

—大阪YMCA「表コミ」の場合—

「自分はどうせだめやねん」と言う中学生に衝撃を受け、どうしても自信を回復する場をつくる! そんな思いでつくった「表コミ(大阪YMCA国際専門学校高等課程表現・コミュニケーション学科)」。その子に合う学び方で学習を進め、コミュニケーションを大切にしている高校です。

大阪YMCA
スタッフ
鍛冶田 千文

「表コミ」生の約7割は、不登校やいじめ経験があり、学校に通っていてもなじみになかった子どもたちです。彼らは、「学びたい」「変わりたい」「楽しい学校生活を送りたい」という強い意志をもって入学してきます。そしていじめを許さない安心できる環境と関係性の中で、大きく変化していきます。

中学時代不登校だったK君は、「表コミ」に入塾しても覇気がなく、気力も感じられませんでした。周りの生徒たちがどんどん成長していく中で、彼の変化は非常にゆくりでした。卒業後、社会人になってからこんな言葉を寄せてくれました。「僕たちが「表コミ」で習ったことをすると周りの人間関係が良くなる。卒業生の僕たちにはそんなポテンシャルがあります」。

「表コミ」で習ったこと。それは、誰もが大切にされる経験、自分の気持ちをアサーティブに(相手を尊重しつつ率直に)伝えること、そして何より自分は自分でいいということです。サポートされる側だった彼らが、しっかり育ち、世の中を変える力があると自信を持っている。これこそがYMCAの願いです。K君は今、作業療法士として病院で働いています。

「表コミ」では、少し変わった子、面白い子……子どもたちの個性や多様性を生かす「インクルーシブ教育」を実践しています。自他ともに認められ自分らしく過ごすことで、本来その子が持っている可能性は大きく広がります。自己肯定感を抱き、幸せを実感するようになった子どもたちは、大人になると、社会を変えていきます。未来の子どもたちにそのような環境を整えることが、私たち大人の責任だと考えます。子ども時代の幸せが、平和な世界をつくるのです。



初めのカヤック。友達とのチャレンジは、楽しい

育つ権利

—タイ・バンコクYMCA「バヤオセンター」の場合—

私は2015年8月から2016年9月まで、横浜YMCAの長期派遣ボランティアとしてバンコクYMCA財団の「バヤオセンター」で過ごしました。バヤオセンターは人身売買を防止するために、さまざまなプロジェクトを行っています。そのうちの1つに、人身売買の被害に遭う可能性のある子どもたちの生活の質を向上させる取り組みがあり、センターでは9歳から16歳の子どもたち33人(2016年度)が、共同生活をしています。貧困のため学校に通うことができない子、家庭内に問題があり家族と一緒に暮らすのが困難な子など、それぞれが課題を抱えています。

横浜YMCA
ボランティア
小野 菜里奈

バヤオセンターの子どもたちは、衣食住、教育、医療の面でも支援を受けています。センターを卒業した後も自立した生活が送れるようにという考えのもと、スタッフはほとんど干渉せず、子どもたちだけで食事を作り、掃除をし、洗濯などを行っています。そのため、リーダーとなる子が年下の子どもの面倒を見ることも習慣となっています。ここで生活をしている子どもたちからは、「センターに来てから、きちんとしたタイ語が話せるようになった(山岳少数民族の子)」「人身売買や子どもの商業的性的搾取(CSEC)について学ぶ機会がたくさんある」などの声を聞きました。

バヤオセンターのスタッフは、国籍取得をサポートしたり、山岳少数民族の村に入り人身売買の危険性や、さらには子どもたちの家庭環境の調査などを行っています。しかし、まだまだ問題が山積みだと、スタッフはよく言っていました。

バヤオセンターで私は、日本からの多くの学生さんやYMCAの方たちと会いました。長期ボランティアを終えて帰国した私にできることは、支援に来られた皆さんとバヤオセンターのつながりを一瞬だけのものではなく、継続的なものにする。双方の距離をより縮めること。今も現地でバヤオセンターのために活動しているボランティアのサポートをすること。そして、タイボランティア、人身売買防止に関心を持ってくださった方々に、私が現地で経験したこと、衝撃を受けたことを伝え、子どもたちを守る働きを上げていくことだと思っています。



山岳民族の刺しゅうをする子どもたち。文化の継承と経済的自立につながる

守られる権利

子どもの権利とYMCA

私たちは、紛争や貧困、差別やいじめなどにより、子どもたちがいのちの危険にさらされたり、心身に痛みを負っている現実を、日々知らされています。

私たちの身近にも、自分の持つ可能性に気付かず、自分が「かけがえのない存在」であることを知らないまま生きていく子どもたちがいます。

子どもたちが、私たちの社会で生きる権利を持っていることは、国連「子どもの権利条約」に明確に記されています。すべての子どもたちの「権利」が守られ、自分らしく、いのち輝いて生きることができるよう、YMCAが行っているさまざまな取り組みを紹介します。

子どもの権利

—国連「子どもの権利条約」— (抜粋)

子どもの基本的な権利を国際的に保障するために定められた「子どもの権利条約」は、前文と本文54条からなり、子どもの生存、発達、保護、参加という権利を実現・確保するために必要となる事項を規定しています。1989年に国連で採択され、1990年に国際条約として発効しました。日本は1994年に批准、世界でこの条約を締結している国と地域は196を数えます(2015年10月現在)。

=「子どもの権利条約」4つの柱=

「子どもの権利条約」で守ることが定められている権利には、4つの柱があります。

生きる権利

子どもたちは、安全な水や十分な栄養を得て、健やかに成長する権利を持っています。



育つ権利

子どもたちは、教育を受ける権利を持っています。また、自分らしく成長するために、休んだり遊んだりすること、自分の考えや信じるものの自由が守られることも重要です。

守られる権利

子どもたちは、あらゆる種類の差別や虐待、搾取から守られる権利を持っています。



参加する権利

子どもたちは、自分に関係のある事柄について自由に意見を表したり、集まってグループを作ったり、活動する権利を持っています。



*参考:公益財団法人日本ユニセフ協会HPより <http://www.unicef.or.jp/>

NEWS

各地の動きをご紹介します。

●障がいのある子どものスポーツ体験 「DREAMクラス」を開催 —東京YMCA

東京YMCAでは、2014年より三菱商事株式会社の支援、江東区教育委員会の後援を受けて「DREAMクラス」を開催しています。このクラスは、近隣の小学校の特別支援学級に通う子どもたちと支援を必要とする子どもたちが、スポーツをすることに興味を持ち継続的に行うようになること、そして、病気やけがの予防につながることを目的としています。三菱商事の社員の方もボランティアリーダーとしてクラスに関わり、YMCAスタッフと一緒に、子どもたちや保護者のサポートをさせていただきます。

クラスは毎月第一日曜日に、東陽町ウエルネスセンターの体育館で行っています。まず、バスケットボールやサッカー、バレーボールなど、ボールを使ったスポーツで親子一緒に体を動かします。その後、着替えてプールへ移動。プールという環境を楽しみながら、水遊びや泳法の習得など、個々のレベルに合わせて体を動かします。締めくくりには、子どもたちの「今日頑張った発表タイム」を設けています。「今できること、できるようになったこと」を披露し合い、周りのみんながそれを応援します。

11月6日は、21回目にして初めて、東陽町ウエルネスセンターではなく、江東区のスポーツ施設「有明スポーツセンター」でクラスを実施しました。7家族21人が、体育館をいっぱい使って、「親子運動会」と「なわ跳び」を行いました。

運動会では、個人競技のパン食い競争、親子対抗の「しっぽとり」、チーム対抗の障害物競争や手を使わない「ペアボール運び」などを行いました。子どもたちには、適度な運動のようでしたが、一緒に頑張ってくれた保護者の皆さんには、ちょっとハードだったようで、終了後には「疲れた～」の声が多く聞こえてきました。



パン食い競争にチャレンジ!

次回からはまた東陽町ウエルネスセンターに戻ってのクラスとなります。寒い時期になってきましたが、体育館で、プールで、また思いきり体を動かし、スポーツを楽しみたいと思います。

東京YMCA 山田 嘉之

●「パレスチナ・オリーブ収穫プログラム」に参加

パレスチナで活動している東エルサレムYMCAは、パレスチナYWCAとの共同により、毎年秋、世界各地から参加者を集めて、農場でのオリーブ収穫の手伝いと軍事占領下にある人びとの生活状況の視察を目的とした「オリーブ収穫プログラム」を実施しています。暴力により分断された地での「正義ある平和の実現」という願いを同じくする在日本韓国YMCAは、日本からの参加者派遣の事務局を、日本YMCA同盟と共に担っています。

今年度のプログラムは10月15日から24日まで開催され、12カ国から65人が参加、日本からもYMCAのメンバーが1人参加しました。日本からの参加者は、これまでに10人を超え、それぞれ帰国後もパレスチナの現状を紹介する活動の企画などを通して、現地の人びとと連帯する働きを続けています。以下は、今年の参加者による報告です。

◆東矢 高明(東京YMCA会員・東北大学YMCAシニア)

オリーブ収穫にあたっては、パレスチナ人農家の方にお世話になり、「パレスチナ人のもてなしは中東No.1」と言われていることに納得しました。

しかし、畑の隣に入植地があり、真上からイスラエル軍監視所に見下ろされているなど、脅威を感じながら日々の生活を送らざるを得ないパレスチナの姿は、私には衝撃と重なって見えました。

訪問した地元のNGOや、夜のオプションプログラムで「世界で最初に難民と定義された」パレスチナ人の歴史と現状の説明を聞きながら、同時に「これがJUSTICE(正義・正しいこと)だと思うか」と、私たちは問われているのです。

乗り継ぎの空港から始まるセキュリティチェックの厳しさ、高性能銃などを携えるイスラエル軍兵士や警官があらゆる所において、パスポートのチェックや手荷物検査も頻繁に行われていました。女性兵士も多く、男女共に徴兵制がある軍事国家・イスラエルは、侵略と占領の地であることを実感しました。



収穫の現場で出会ったおばあさんと孫娘

パレスチナには高さ8メートルの分離壁が築かれ、人びとの暮らしの現場を分断しています。出入国の際に送ってくれた二人のパレスチナ人が、「ここは俺たちの国なのに、あの壁の向こうには行けないんだ」と語った時の悲しいまなざしを忘れることができません。



銃を携えるイスラエル軍兵士

アジア・世界のYMCAから

◆モンゴルYMCAは3周年 —アジア・太平洋YMCA同盟

2013年9月に設立されたモンゴルYMCAは、世界でも新しいYMCAです。モンゴルの地域社会で活躍する若者の国内最大のネットワークになることを目指しています。運営する英語教室やコーヒーショップは、若者がYMCAを知り、関わる機会を生み出すスペースとなっています。コーヒーショップでは、おいしいコーヒーを楽しみながら友人や同僚同士で語り合う姿が見られ、日曜礼拝にも利用されています。

◆YMCA気候変動キャンプ2016開催 —世界YMCA同盟

世界YMCA同盟は、モロッコで開催された「気候変動枠組条約第22回締約国会議」(COP22)への若者の参加を推進し、11月7～18日のCOP22期間中、気候変動や環境問題に関心を持って知識を深めてきた若者200人以上が「気候変動キャンプ」に集まりました。会場には、世界中のYMCAから提供された布や装飾品を使ったブースを設置し多くの人を招き入れました。YMCAの強みは「グローバル」な活動を行うだけでなく、実現に向けた行動の拠点となる世界各地のYMCA(「ローカル(地域)」)と強いつながりを持っていることです。良いアイデアは共有し、実現につなげていきます。



モロッコのマラケッシュに若者が集結!

◆アフリカYMCA・ユースの声コンテスト —アフリカYMCA同盟

アフリカYMCA同盟は、若者に向けて「あなたの声を聞かせてください」という呼びかけを行いました。アフリカに住んでいる17～35歳の若者(ユース)が対象のコンテストです。このコンテストには、エッセイ、詩、短編小説の3つの部門があります。ユース一人ひとりが、「自分の周りの人たち」や「アフリカの未来」に与える影響を考え、アフリカの若者としてのアイデンティティ(意見、信念、価値観、経験など)を表明する機会です。入賞者(1-3位)は2017年1月18日に発表されます。多くの作品の応募がありますように。

●上記トピックの詳細(隔月PDF)は、日本YMCA同盟HPの「世界のYMCA」ページよりご覧いただけます。<http://www.YMCAjapan.org/world/index.html>

●「第3回防災ワークショップ:一緒に考えよう「減災」」を実施 — 京都YMCA

京都YMCAでは2013年より、一人ひとりが災害への備えと災害時の対応を考えるきっかけとなるよう、11月に「防災ワークショップ」を開催しています。今年は、災害に対してどのような備えをし、被害を最小限に抑えるかという「減災」をテーマに、京都市中京消防署職員の大田仙行氏をお招きして「第3回防災ワークショップ:一緒に考えよう「減災」」を京都YMCA三条本館にて開催、ワイズメンを中心とする15人が参加しました。

前半の講習会では、大田氏から「減災」意識—「自分は大丈夫」という思い込み(正常化の偏見)を捨て、災害に対する想像力を持つこと—の重要性が話されました。「世界津波の日(11月5日)」の由来となった「稲むらの火」や東日本大震災での「津波でんご」のエピソードなどを踏まえ、長年の訓練と教育の大切さや、行政などの支援「公助」に頼るだけではない、自分自身を守る「自助」、家族や地域で助け合う「共助」の充実が減災につながることを解説していただきました。

後半のワークショップでは、参加者が3グループに分かれて、それぞれの備えを見直し、今できる備えと今ある課題を出し合いました。どの参加者も防災に対する意識が高く、ご自身が普段から行っている備えを紹介し、アイデアを共有し合いました。参加者の中には町内会の役員や消防団員として活動されている方もおり、自分自身の備えだけでなく、町全体でいかに防災に関心を持ってもらうかということについて、「町内全体で避難場所を決めておいては」といったものから、「町内会で備蓄している非常食の買い替え時期に、運動会や地藏盆などの地域のイベントで食べてい



前半の講習会では「災害に対する備え」などを学んだ

ただ、非常食を身近なものとして意識してもらうきっかけにしては」といった具体的なもので、「共助」のアイデアも多く出されました。

今回のワークショップで共有された学びが、地域で生かされ、「減災」へとつながることを願っています。

京都YMCA 上野 貴子